

アトピー性皮膚炎の最近の治療

神戸掖済会病院

皮膚科医長 後藤 典子

「アトピー性皮膚炎ってどんな病気？」

アトピー性皮膚炎は 慢性的に繰り返す皮膚の炎症性疾患です。主な症状はかゆみのある湿疹で、特に頭や顔、くびなどの部位、小児では肘や膝などの屈曲部に症状が出やすいです。かゆみのせいで日中仕事や勉強に集中できなったり、夜間目が覚めて十分に睡眠がとれないことがあります。また気管支喘息、アレルギー性鼻炎、結膜炎などの他のアレルギー疾患を合併していることが多いです。

「アトピー性皮膚炎の原因は何？」

多くは遺伝的な原因で皮膚の最表面の角層や表皮の機能に異常があり、角層の水分を蓄えておく能力や皮膚本来のバリア機能が低い状態にあります。皮膚のバリア機能の低下は外界からのアレルギーの原因物質の皮膚への浸入しやすさにつながります。アトピー性皮膚炎では 2 型免疫応答という種類のアレルギー反応が過剰に生じていて、かゆみを引き起こしたり、皮膚をがさがさと肥厚させて「苔癬化」という皮膚の状態に変化させたりします。

「アトピー性皮膚炎にはどんな治療がある？」

アトピー性皮膚炎の治療の基本は軟膏類の外用です。皮膚のバリア機能が低いことから、まずはしっかりと保湿剤を塗布することが重要です。最近では、乳児期にしっかりと保湿することでアトピー性皮膚炎や喘息などのアレルギー疾患を予防する効果があると言われています。湿疹等皮膚に症状が出てくる部位にはステロイドや免疫抑制剤で炎症をおさえます。抗ヒスタミン薬や抗アレルギー剤等のかゆみを落ち着かせる内服薬を併用することもあります。軽症ではこれらの治療でコントロール可能なことが多いですが、難しい場合は紫外線照射や免疫抑制剤内服が検討されることもあります。また、一見皮膚症状が治まった状態でも軽い炎症がくすぶっている時期があり、この時期にプロアクティブ療法といって例えば週 2～3 回程度に外用頻度を減らして継続し、次の炎症再燃を予防することが重要です。

「アトピー性皮膚炎の新規治療」

中等症以上の症状を持つアトピー性皮膚炎の患者様の中には、これらの従来からの治療で症状コントロールが難しい患者様が多くみられていました。そういった中、2018 年以降さまざまなアトピー性皮膚炎に対する新規薬剤が登場してきました。新規薬剤は、主に生物学的製剤という注射薬と JAK 阻害剤という内服薬に大別されます。生物学的製剤は、アトピー性皮膚炎の病態の中心になっている分子を特異的に抑制し、症状の改善に効果を発揮します。現在デュピルマブ、ネモリズマブ、トラロキヌマブという 3 製剤が適応になっています。自宅で自己注射の選択肢もあり、忙しい患者様にとっては通院頻度が少なくなり治療継続しやすい場合もあります。細菌やウイルス感染に対する免疫をほとんど抑制しないといわれており、比較的安全性の高い治療法です。JAK 阻害剤は、免疫系の分子の細胞内シグナル伝達を抑制することで炎症や免疫をおさえる薬剤です。症状の改善に効果的で特にかゆみに対し即効性がありますが、細菌やウイルス感染に弱くなる場合があり血液検査等行い副作用が出ていないか確認しながら治療を継続します。これらの生物学的製剤・JAK 阻害剤の中には、小児でも適応になっている薬剤もあります。また、外用剤についてもデルゴシチニブやジファミラスト等、亜急性期から慢性期の炎症のくすぶった状態に有効な治療薬が適応になっています。注射薬や内服薬といった全身療法、外用療法ともにこの数年で飛躍的に治療の選択肢が増えました。

「まとめ」

最近では、アトピー性皮膚炎の治療の選択肢がずいぶん増えました。これまで治療に難渋していた中等症以上のアトピー性皮膚炎の患者様にとっては、新規の全身療法により大幅に生活の質を改善できる可能性があります。また、軽症の方の場合も慢性期の炎症のくすぶった時期の治療によりコントロールの良い落ち着いた皮膚状態を長期間維持できるようになってきました。アトピー性皮膚炎の病態についての研究の進歩により、今後も治療に有効な薬剤が開発され、さらに治療の選択肢が増えることが期待されます。

